

訂改高等女學讀本 卷六

375.9  
S20  
資料室

42139

教科書文庫

4  
810  
42-1916  
200030  
1963

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

375.9  
Sd20

資料室

日二十二月一年五正大

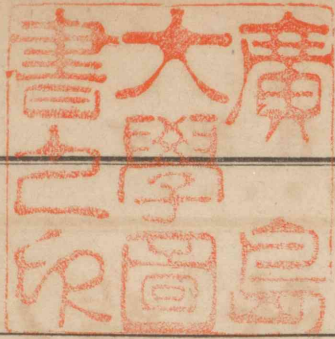
濟定檢省部文

用科語國校學女等高等

佐藤 球  
鹽井 正男  
共編

訂改 高等女學讀本

東京 株式會社 明治書院



訂改 高等女學讀本卷六目次

一、	禁庭の野分	一
二、	月(口語文)	四
三、	良夜	六
四、	空行く雁 その一	九
五、	空行く雁 その二	一二
六、	富士川下り(書簡文)	一五
七、	田園雜興	一九
八、	蟲の聲	二五

目次

九、	足柄山 (韻文) .....	二八
一〇、	戰國時代の世態 .....	三一
一一、	小澤蘆庵と蒲生君平 その一 .....	三七
一二、	小澤蘆庵と蒲生君平 その二 .....	四三
一三、	白峯の陵 .....	四七
一四、	京 都 .....	五一
一五、	桃山時代の工業 .....	五七
一六、	古寺社と國寶 .....	六一
一七、	月の洞庭湖 (口語文) .....	六四
一八、	筆の歌 (韻文) .....	六九
一九、	我が家の富 .....	七一

二〇、	動植物配合の美 .....	七五
二一、	狩野芳崖 .....	七九
二二、	天津風 (短歌) .....	八六
二三、	馬關砲撃 (口語文) .....	八七
二四、	尊王論の起因 .....	九四
二五、	岩倉公の逸事 その一 .....	九八
二六、	岩倉公の逸事 その二 .....	一〇四
二七、	蘇 武 (韻文) .....	一一三
二八、	故事二則 (漢文和譯) .....	一一八
二九、	婦人の力 .....	一二〇
三〇、	交際と文學の趣味 .....	一二五

卷六目次終

改訂高等女學讀本卷六



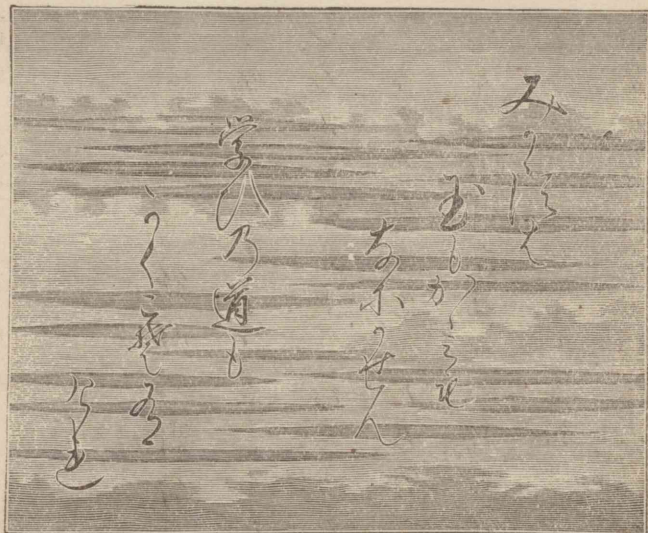
一、禁庭の野分(昭憲皇太后御作)

朝露のひるまはさしもなかりし空の俄にかき曇り、夕づつ  
の光も見えず。とかくするほどに、雨いたく降りいでて、ほ  
とり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。聞  
に入る頃は、なほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷  
さへなりはたゝきて、夢うつゝとも思ひ定めぬに、ひまなく  
稻妻のきらめきわたる、いとけうとし。曉がたには、雨はや  
みぬれど、風はげしう吹き出でて、宮の内もゆるぐばかりな

上  
明治天皇を申す。

皇太后の宮  
英照皇太后を申す。

るに、いとど目もあはず。



昭 憲 皇 太 后 御 筆

上には民の爲とて、畏くも遠き境に出でましたる程なれば、いかなる行宮にましまして、この風の音に御心を惱まし給ふらん。  
皇太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちもおどろきやし給ふらんと思ひつづくるほどに、夜も明けぬれど、未だ風しづまらで、いづこもおろし籠めたる、いとも

階—陸

のむづかし。軒近き栗の枝の、結べる實ながら吹き折らるゝ音いとはげしく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れふしぬ。今をさかりなりし眞萩も、名残なくちりみだれたる、いとさびしく見ゆ。宮の内だにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは、たふれたるも多からんなど思ひやれば、すゝろに悲し。

おしなべてみのりよしと聞きつる千町田の稲も、吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國のため、科戸しとの神もこゝろして、

稲葉のうへはよきてふかなむ。

なほ、とやかくやと胸をいたむるほどに、いつとなくしづ

まりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心もおちるにけり。(高等小學讀本)

一、月

むかし顯基中納言といふ人は、罪なくて配所の月を見れば「や」といつた。月夜の玲瓏隈なき光は、俯仰天地に愧ぢることなき心を以て眺めてこそ、肝膽相照らす友である。眺められる月に一點の曇もなく、ながめる我が心に一塵の汚もない美はしき。良心の眞澄の鏡は、すなはち皎然たる月の光に外ならぬ。ぬば玉の闇の世の中に、すみ昇る一輪のさやけき光は、我が心に對しての唯一の昭鑑者である。月の面を往來す

眺めてこそ  
—友である  
膽—瞻

妄—忘

る浮雲は、やゝともすると我が心を亂さうとする誘惑物のごときものであらう。天地間の萬物は、皆多少の濁を帯びて居るから、何物を見ても恥ぢることを知らない人でも、皓々たる清光に對しては、自ら襟を正さざるを得ない。すなはち、一切の邪念、あらゆる妄想は、これに對して拂ひ去られるのである。若し心の底に何等かの疚しい點があれば、月に對して悔まなければならぬ。月に對して懺悔しなければならぬ。罪ある人の目で、この影に對したならば、清淨の光は、恐らくは後悔の涙に宿るであらう。慈愛の色も、却て焦熱の炎かとおもはれるであらう。嗚呼、今の汚れたる世の中に、たとへ配所に行かず、獄屋に入らないでも、ひとり自ら顧みて、月に對

恐らくは—  
宿るであら  
う(恐ラク  
ハ)—思は  
れるであら  
う

して恥ぢない人は幾人あらうか。心靜に月を楽しむ人は、世に一人の友がなくても、誠に俯仰天地に愧ぢることのない人である。(芳賀矢一「月雪花」)

三、良夜

良夜とは今宵ならん。今宵は陰曆七月十五夜なり。月清く風涼し。

夜業の筆をおき、枝折戸開けて、十五六歩邸内を行けば、栗の大木の眞黒に茂れる邊に出でぬ。その陰に井戸あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。時々白銀の雫のほたりと墜つるは、誰が水を汲みて去にしにか。

瓜一瓜

さらに行きて、畑の中にたゞずむ。月はいまかなたの大竹藪を離れて、清光溶々として天地に流れみちたり。星の光何ぞうすき。冰川の森も淡くして煙のごとく見ゆ。靜に立ちてあれば、わが側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は、月光を浴びて青びかりに光り、棕櫚はさやくと月にさやく。蟲の音しげき草を踏めば、月影爪先に散りゆく。露のこぼるゝなり。藪のあたりには、しきりに烏の聲す。月のあかきに、彼等もえ眠らぬなるべし。

うち開けたる所は月光水の如く流れ、樹下は月光青き雨の如くに漏りぬ。歩を廻して樹蔭を過ぐるに、燈火の影木の間をもれて、人の夜涼に語るあり。

斑一

枝折戸閉ちて縁に踞するほどに、十時も過ぎて、往來の人跡全く絶え、月は頭上に來りぬ。

月は一庭の樹を照らし、樹は一庭の影を描き、影と光と、黒白斑々として庭に滿つ。縁に大きなる楓の如き影を印せるは金剛纂なり。月光その滑なる葉の面に映じて、葉はさながら碧玉の扇と照れるが、その上にまた黒き斑點ありて、ちらちらとゆらめくは李樹の影なり。

風の梢をわたる毎に、月光と樹影と相抱いて跳り、白ゆらぎ、黒さゝめきて、その中を歩する身は、これ無熱池の藻の間にあそぶ魚にあらざるかを疑ふ。(徳富健次郎「自然と人生」)

四、空行く雁その一

新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕ぐれ、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は何國にましますぞや。往きてをがみ奉らばや。母御前、いざさせ給へ」といひければ、遙に忘れたるこし方も、今さら思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣くくゝのたまひけるは、「あの會我殿こそ、おのれ等が父にてあれ」と、心づよくかたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王かさねて申しけるは、「父御前は、まことやらむ「狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藹とやらに射られ、死に給ひぬ」と、兄御前は語ら

新玉の年  
養和元年。

一萬箱王

祐隆

祐家

祐繼

祐親

祐泰

祐成(萬時致箱王)

祐經

母

名は滿江、祐泰の死後、會我に再嫁す。

會我殿

太郎祐信。

工藤一藹  
祐經なり。



鎌倉殿  
源頼朝

この里  
相模國足柄下  
郡曾我中村

隈一狼

にてぞあ  
るらむ

せ給ふぞや。當時、鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。われらをも殺さむとや思ふらむ。われらがこの里に在りと知らずや過ぐらむなど、おとなしく語りければ、母よりはじめて、女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて、夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びたるに、五つ連れたる雁がねの、南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿、空を飛ぶつばさも、皆、別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に

河津殿  
祐泰なり

人もこそ  
聞け

生まれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。われらが父をば、河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなむ。われより幼き者にて、馬鞍、弓矢をもて、物を射ありくことの羨ましきよ。是等の事ども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀ひしくおはしますぞや」とて、袖に顔をさし入れて、さめくと泣きければ、弟もこざかし、顔をあはせて泣き居たり。一萬の乳母の女房、これを聞きて、「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに、和上郎達、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。とくく、入らせ給へ」と、怖しげ

にいひければ、二人のものは門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。

五、空行く雁 その二

或時、兄弟は竹の小弓に、薄矧オチシバの小矢を取りそへて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立ち向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、われらもいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならむ野山にてもあれ、親の敵祐經を、かくの如くさし合ひて射取りて、ともかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はむ。弓矢は男の一の能にあるるぞ」といひ

仰抑

ければ、弟もうちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきことかなと、人々思ひけり。

一萬が乳母、この由を聞き知りて、大きに驚きて、母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子どもを呼び寄せ、泣く泣く語られけるは、實か、おのれ等が、さも怖しき謀叛を起さむと議しあふなるは、もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を、松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれ等かゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千度百度悲しむともかなふべきか。その上汝等が鎌倉殿へ召

伊東入道  
祐親なり。  
千鶴御前  
母は祐親の  
女。  
松河が淵  
伊豆國田方郡  
伊東。  
左衛門尉  
祐經なり。

石橋山の戦  
治承四年八月、石橋山は、相模國足柄下郡。  
土肥の杉山  
同郡土肥の山谷、石橋山の南。  
梶原景時  
頼朝の寵臣。

穩—隱—慥

況や—あいてをや

されし時も、曾我殿歎き申してとゞまりたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戦に打ち負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と、二人心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆返しまゐらせ、二人の幼き者どもを助けて給はらむと申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それ程の志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ』と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて、今まで希有の命を保ちたるぞ、それにつきても、曾我殿の芳恩をば、生々世々にも報じつくすべきか。鳥類・畜類にても恩を知るとこそ聞け。況や、汝等人倫においてをや。しかるを、却て曾我殿に歎を與へむこと、返すくも口惜しかるべし。その恩を報

ぜむと思はば、速に謀叛をとゞむべしと、口説きたてて誠められければ、二人の子ども、目と目とを見合はせ、顔うち赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬところにては、内々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も、内々、怖しき者どもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむとぞ思はれける。(曾我物語)

六、富士川くだり

提—堤

朝早く起き、提燈さげたる宿の小婢に案内せられて、川舟に下り候。舟は薄き板にて造り、幅一間、長さ七間ばかり



餐一祭

水に入り、磧を踏み、身を弓の如く撓ませて、空舟を曳き上る、見るもいたはしきに、下りに慣れては、舟行も猶遲きが如く、川風の寒きにふるひ、足のしびれにひそみ、奇景も何も眼に入らず、欠伸ばばかり致し候。

舟は亂山の間を縫ひて、甲より駿に入り、はじめて富士を左に仰ぎ候。それより、某製紙會社の建物を左岸に見つゝ、下る程に行く程に、山開けて川廣く、富士川の鐵橋を透して、碧海に白帆の點々たるを望めば、心も自ら開豁となりしを覺え候。岩淵に著きて時計を見れば、十一時に候。歟澤より十八里、六時間にて下りしわけに候。

こゝにて午餐ををへ、汽車に乗りて、午後七時、家苞に持

逗子  
相模國三浦郡

ち來たる百目柿葡萄の籠を、どさりと逗子の家の縁側におろし候。(徳富健次郎)

七、 田園雜興

みづから世を避けて門を鎖すとはあらねど、片田舎に住めば、來り訪ふ者おのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街を離れて一字の茅屋立てり。屋外凡そ千坪前に葡萄棚あり。後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、其の間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。

われ年來病軀を抱けり。我が志を伸ばさんには、先づ我が

堵一賭

綠—綠

體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街  
 上の塵埃到り及ばず。管に我が心に適するのみならず、亦我  
 が體に適す。汽車の便をかりて都門より歸り來れば、滿園の  
 綠樹笑つて我を迎ふ。穉兒走り來りて、わが手の風呂敷包に  
 取り纏る。例として土産の菓子あらんことを期するなり。さ  
 るにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の  
 父となりぬるこそ愧かしけれ。

緒—緒

蒸暑き夏の夕涼臺を無果花樹下に移して、一家晚餐に團  
 欒すれば、竹葉戰ぎて涼氣自ら盤上に迸る。ひと鉢の飯、母と  
 分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。今ひとつ、一匹  
 の犬、いつも食時を違へず來りてかしこまる。これ近鄰の家

除—徐

に飼へるものなり。その主人、近頃妻子を残して病死せり。喪  
 家の狗の譬、思ひ出されてあはれなるまゝに、殘肴を投げ與  
 ふるを常とすれど、貧家の厨、魚なきこと多し。馬鈴薯など與  
 ふるに、たゞ鼻先に嗅ぎたるのみにて、悄然として立ち去る  
 こそ氣の毒なれ。

一泓の池水、二間四方に足らざるほどなれど、清水涌き出  
 でて、流れて田に灌ぐ。もとは朽木中に満ちて、蛙や、おもりの  
 棲處となり、岸には雜草生ひ茂りて見る影もなかりしが、草  
 を芟り、朽木を取り除け、おもりを捕へ出すこと七八十に及  
 び、水始めて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、  
 蛙、おもりのみと思の外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて遊ぎ

めぐり、人の足音聞きては底深く潜みゆく。大兒と中兒とこれを見て興がり、今少し鯉を入れよといふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を畫き、或は集まり、或は散じ、時には水面に唵喁し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋上に立ちて、これを眺め、これに餌を與ふること、三兒にとりてはこの上もなき慰なり。

覺束なげに、「と、と」と呼びて、雞に餌を與ふことも、亦小兒が慰の一つなり。家の四方に散り遊べる雞、この聲を聞きて喜んで來り集まり、先を争うて啄む。雄三羽、雌七羽ばかりあり。種類も一ならず。就中シヤモの雌一羽最も慄悍なり。

餌貪ること最も甚だしく、近よるものの頭を嘴にてつゝくさま、如何にも憎さげにて、他の雞恐れて敢へて近よらず。されど、最も大いにして良き卵を生むは、このシヤモなり。

園中、また時に随つて梅の實あり、葡萄あり、柿あり、栗あり、無果花あり、筍あり、蟬鳴き、蜻蛉飛ぶ。此等皆兒の喜ぶ所の者なり。喜ぶ兒を見れば、余はたゞ嬉しきなり。慾もなし。名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、初はその愛すべきを覺え、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には、何等かの神異の潜めるが如く思はる。而して、小兒は人類の中にて最も自然に近きものなり。よしや、子を持つて未だ親の恩を思はずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。

朶一孕

樂しき我が團欒にも、なほ一朶の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住むことも前後僅に十餘年に過ぎず。末年われと相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の如きか。然るにわが病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なるを氣遣ひ、わが食量少なきを心配す。親を思ふ心にまさる親心と詠じけん、世に子の病ばかり親の心を痛ましむるものなし。いかに我が身の罪の深きかな。抑、亦いかに不孝の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名故、われは親故に、強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし

親を思ふ云々

々

吉田松陰の

歌「親を思ふ

心にまさる親

心、今日のお

とづれいかに

聞くらむ。」

廉頗

趙の武臣。

晝食さへものするに至りぬ。食事進むやうになりて嬉しとて、母の喜ぶさま見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。(大町芳衛)

### 八、蟲の聲

垣根の朝顔やうくく小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花見ゆるもあはれなるに、松蟲鈴蟲鳴き弱りて、朝日まちとりて竈馬の果敢なげに聲する小溝の端、壁の中など、有るか無きかの命のほど、老いたる人、病める人など聞きたらば、さこそは身にたぐへられて物悲しからめ。まだ初霜はおくまじきを、今年は蟲の齡いと短くて、早く

さこそは物悲しからめ



親ぞ知ら  
まほしき

も聲のかれど、に成りにしかな。蟬蟲は喧しき聲も形も、いと丈夫めかしきを、いつしか時の間に衰へ行くらん。人にもさるたぐひは有りけりとをかし。鈴蟲は振り出でて鳴く聲の美しければ、物嫉せられて齡の短きをなめりとうなづかる。松蟲も同じことなれど、名と實と伴はねば、あやしまるゝぞかし。常磐の松を名に呼べば、千歳ならずとも、枯野の末までだにあるべきを、萩の花散りこぼるゝ、やがて聲せず成り行く。さる命短きものなれば、暫時も似よと、この名を負はせけん。親ぞ知らまほしき。

とぞ合へ  
りし

耳につきてもの佗びしく、あの聲なくばいを安く睡らるべしなど言へれば、急ぎ取り下して庭草の茂みに放ちぬ。その夜鳴きぬやと試みたれど、さらに聲の聞えねば、俄におく露の身に寒くて、え鳴かぬにかとぞ憐み合へりし。その年暮れて、兄は空しき數に入りつ。

又の年の秋、この頃ぞなど、過ぎにしこと思ひ出づる折しも、夜更けて、近き垣根の中に、さながらの聲聞き出でぬ。よもあらじと思へど、たゞ其のものやうに懐かし、戀ひしきにも珍しきにも、涙のみこぼれて、此の蟲のやうに、よし異人なりとも、聲も貌も同じからん人の、たゞ今こゝに立ち出て來たらば如何ならん。我はその袖をつと捉へて放つまじく、

のみなひ  
よりぬる

母は嬉しさに物はいはれて、涙のみはふらしおとしますら  
ん、父は如何さまにまどひ給ふらんなど、怪しき事をのみな  
む思ひよりぬる。  
かくて二夜ばかり鳴きつ。その後はいづち行きけん、ほの  
かにも聲の聞えずなりぬ。今も松蟲の聲聞けば、やがてその  
折思ひ出でられて物悲しきに、籠に飼ふことは更にも思ひ  
寄らず。おのづから野邊に鳴き弱りゆくだに、たゞ過ぎにし  
秋の別のやうに思はるゝぞかし。(樋口夏子 明治百家文選)

九、足柄山 (藤岡作太郎)

奥にいくさの 起れるに、

兄  
源義家。

兄の身の上 氣づかはし、  
よそに聞かじと、 丈夫が  
官を辭して、 行く秋の  
風に鞭うち 馳せくだる。

鏡の宿  
近江國野洲  
郡。

鏡の宿を 過ぐるほど、  
形に影の おくれじと、  
手綱かいくり 追ひ來る

豊原ぬし  
時秋。

縹の狩衣 青ばかま。  
「豊原ぬしか、 いかにして。」

鳴海  
尾張國愛知郡  
清見の關  
駿河國庵原郡

茵茵

とかくはいはで	俯きつ
「懐かしければ	おん供」と
とむるも聽かて	慕ひ行く。
鳴海の千鳥	あとやさき
清見の關 <small>セキ</small> も	過ぎにけり。
足柄山に	駒とめて
楯を茵 <small>ヒリス</small> と	むかひ坐す。
家の祕曲に	あこがるゝ
ふかき心の	あはれさに
今ぞ傳ふる	樂の曲。

笙の音高く さえ上る  
 空に一輪 月清く、  
 ひかりは落つる 袖の露  
 涙はらひて、「これまで」と  
 東へ西へ 別れ行く。

一〇、 戦國時代の世態

亂世のならひ、上下の秩序も定まらねば、昨日の貴きは、今日の卑しきになるものあり、今日の卑しきも、明日は貴きを期すべきをもて、武人の一朝志を得て富貴の身となりたる

義滿  
足利三代の將軍。  
義政  
足利八代の將軍。

は、驕奢をつとめて他の耳目を驚かすことあり。義滿の北山に金閣を建て、義政の東山に銀閣を建てたるなども、一は太平をよそひ、一は富貴を衒へるにあらざるか。

殊に、建武争亂以來、武人は常に茶會・田樂・猿樂等の遊興に耽りて、その驕奢のために、下を虐ぐることに大かたならず。

抑、當時武人と稱する者は、守護地頭もあり、守護地頭の家人もあり、また、農人・商人などの武事を好みてなれるもあり、その武人は、兵亂の起る毎に、大となく小となく、一族をかたらひ、家人を催して、家々の旗を押し立て、意の向ふ方に荷擔して、戦場に出づるならひなれば、戦場より戦場にと移り行きて、年をわたるもあれば、もとより兵糧の用意に及ばず、

してぞ免  
れたりし

或時は敵の糧を奪ひ、或時は民家を剽掠してぞ、纔にその飢渴は免れたりし。

されば、武人の去就のさだめなきも、この頃を第一とすべきか。はやう、新田義貞の足利尊氏追討として東下せしには、初のほどは總勢七萬餘人と數へたりしに、一敗の後には、僅に五百餘人を餘して、他は皆散亡し、陣處々々は、たゞ空しく旗幕のみを遺ししに反して、尊氏方は陣營山野に連なり、大軍俄にとよめきわたりて、忽ち八十餘萬人と註せりといふ。

この武人世界の劔戟の中に在りて、父母を養ひ、妻子を育む農工商の輩はいかならん。その住居せる國郡の、甲に屬すれば甲に役せられ、乙に屬すれば乙に役せられて、一年兩度

遺遣

奪<sup>カク</sup>奪<sup>ク</sup>奪<sup>ク</sup>奪<sup>ク</sup>

の變更あれば、租税は甲乙より責めらるゝこともあなるに、  
武人來る毎には、剽掠に遭ひて資財を奪はるゝこと、幾度と  
いふ限なく、剩へ、父母を殺さるゝあり、妻子を傷けらるゝあ  
り。まして、軍旅の過ぐる所は、大抵兵燹に罹りて、蕩然として  
荒野となれば、雨露を凌ぐ家は焼かれ、露命をつなぐ米麥は  
失はれて、樹下に凍死し、路傍に餓死する者數を知らず。加ふ  
るに、徳政といふ一種不思議なる法行はれたり。徳政とは貸  
借を消滅する政にて、貸したるは貸したるを損として、責む  
ることを禁じ、借りたるは借りたるを徳として、償ふことを  
許さぬ法なり。かの武人の輩は、常にこの法を行ひて、自己の  
榮耀の資とすること、幾度といふ限なければ、人皆疑ひ懼れ

廢<sup>ク</sup>廢<sup>ク</sup>廢<sup>ク</sup>廢<sup>ク</sup>

廢<sup>ク</sup>廢<sup>ク</sup>廢<sup>ク</sup>廢<sup>ク</sup>

て、貸さんといふ者なし。然れども、なほ貸さてえあるまじき  
は、その證文に、「徳政に遭ふとも違約せじ」といふ文言を加へ  
しむるに至れり。  
かゝる不幸の世にも、生まれ來てはいかゞはせん。艱難は  
艱難なりと雖も、その業を廢すべくもあらねば、農人は田畑  
を耕し、工人は器物を造りて、からくも世を過してはあるに、  
工藝は卻てこの時代に進みて、刀劍・甲冑・馬具・弓・槍も、漸く精  
巧をきはめたり。殊に、商人は、武人の遊興に耽りて、珍奇の器  
物を競ふに乘じ、常に支那・朝鮮に往來して、種々の貨物を輸  
し、支那・朝鮮の商船も、また諸港に來泊せしかば、見も知らぬ  
器機・調度も多く渡り來れり。かく商人の海外に出づるもあ

れど、それは大かた四國九州の海邊の住民にて、さらぬは、鄰國・鄰郡にも出づるを許されずして、一地方に鎖されてありし程に、虐政に遭ひても訴ふる方なければ、時としては、一部の<sup>人</sup>、相結びて一揆となりて、領主の館内に亂入し、人を殺し貨物を奪ひて、平生の怨を報ゆるなどもありき。また、かく部民の一地方に鎖されたるは、海國なるは終身山を見ぬもあり、山國なるは世を経て海を知らぬもありて、年を積み代を累ねゆくまゝに、東國の言語は西國の言語と異に、南方の手ぶりは北方の手ぶりと異にて、同一國人を區別せること、宛も一國の地圖に、諸州を染め分けて見るが如くなれば、當時の武人は、各地の人情風俗を知らんが爲に、團扇などにも、その

扇一扉  
をレんかう

要を記して攜へたりといふ。(物集高見—日本文明史略による)

一一、小澤蘆庵と蒲生君平その一

アタカ

寛政二年  
光格天皇の  
時。二四五〇  
年。  
建武・延元  
後醍醐天皇の  
時。  
應仁  
後土御門天皇  
の時。  
少なきこそ  
—安からね

寛政二年の冬なりき。君平つらく思へらく、昔時、建武・延元の内亂より、應仁の兵火に至りて、天朝の舊典みな悉く亡失し、文章は永く地を拂ひて、世は戰國となりしこと二百餘年、その惡俗の餘毒流れて、昇平の今の世まで、洗ひ清めんとするものの少なきこそ安からね。いで、わが古學を興して、國體を張り、天下の爲に死力を盡して、國恩に報ずべしと。乃ち指を嚙み血を染めて、孝子之情、有終身喪、忠臣之心、無革命時と大書し、愈、志願の臍をぞ堅めける。

林家  
徳川幕府に仕  
へて、代々大  
學頭たり。

その後、君平、江戸に往來しける時、林家の門人となりて、帶  
刀して儒學を唱へ、時に名高き儒者・國學者・文人・墨客と交り  
て、遊學すること久しかりき。されど、その持論、時情に愜はず。  
或はこれを迂闊とし、或はこれを狂妄として、嘲り、噓はぬ者  
は稀なり。君平、これをものの數ともせず、愈、守りて自ら貶さ  
ず。嘗て、その友に語りて曰はく、「昔の儒官は、明に天朝の故實  
に通達し、六經を以てこれが資としたりければ、名正しく事  
行はれざることをなかりき。然るに、今の俗儒は、天朝の故實を  
知らず。なほ夏夷順逆の理に暗くして、名を亂り、言を紊るも  
の多し。その位にあるものは、その道を行ひ、その位にあらざ  
るものは、その言を行ふこと、古今一致なり。わが憤を發し、志

六經  
詩、書、易、禮  
記、春秋、樂  
記。

東夷人物傳

を立て、古學を興して、逸史を修め、力を經世に盡して、國恩に  
報じ奉らんと欲するは、他なし。かの曲學阿世、名教の罪人た  
ることを知らざる者と共に、鄰をなさじと思ふのみとぞい  
きまきける。

山陵志  
二卷。歷代山  
陵のことを考  
證して記した  
るもの。

この頃よりして、君平、古昔の山陵多く荒廢して、その迹定  
かならざるものありと聞くこと久しかりしかば、まづ山陵  
志より、窺めんとて、京に赴き、それより、南海を越え、淡路に渡  
りき。元より路費の乏しきを憂とせず、險を履み、風雪を冒し  
て、遂に、六十六國、その半ばを經歷し、或時は里老に問ひ、或時  
は舊圖を考へて、諸陵存亡の趣を目撃したりけり。而して、そ  
の著述の爲に、辛苦を辭せず、月日は旅寢に移れども、その志

困一因

小澤蘆庵  
歌人。名は玄  
中、蘆庵はそ  
の號、尾張の  
人。

僕一僕

移らずして、愈、精力を盡しけり。  
はじめ、君平、山陵探求の爲に京に赴きし時、かの地に絶え  
て知る人なかりければ、便らん方もなくて、困じ果てたり。時  
に、小澤蘆庵は古學を好みて、萬葉風の詠歌に名高く、世に拗  
ねたる隱逸なりと聞きしかば、その助を借らんとて、やがて  
蘆庵が宿所をおとなふに、そが僕出て迎へて、「いづこより」と  
問ふ。伴りて、「某は下野なる宇都宮の蒲生伊三郎といふ者な  
り。琴を好み候へども、田舎にはよき師なし。主人の翁は琴の  
妙手にておはする由聞き傳へて、はるくと尋ね來つるに  
て候ふ」といふ。僕は奥に赴きてこれを告げたるに、蘆庵は聲  
を高くして、「あな、無益にも訪はるゝものかな。汝いでて、しか

うるさけれ  
ば一代へた  
り



蒲生君平肖像

答へよ。主人は久しう客を辭し交を絶ちたれば、都の中だに  
も親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時搔き鳴らした  
りけるを、遠近の人に知ら  
れて、彼に聽かせよ、これに  
教へよといはるゝがうる  
さければ、近頃うち摧きて  
薪に代へたり。かゝれば、所  
望に従ふべくもあらず。他  
に求め給へ」といへ」といふ。  
君平は僕が報ずるをも待  
たず、翁の御答はこゝにもつばらに洩れ聞えたり。某をほ一



枉一狂

言あり。願はくは枉げて聞き給へ。われは實は儒者なり。しか  
 じかの志願ありて都に上りつれども、相識れる者絶えてな  
 し。翁の古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬとは、かねて  
 傳へ聞きしものから、いひよる由のなきまゝに「琴を學ばん  
 とて來つ」とはいひしなり。こは、長者を欺くに似たれども、そ  
 の虚言は已むことを得ざるより出でたるなり。今一度、大殿  
 を勞せん。この由取り次ぎ給へ」といふ。蘆庵もこれを洩れ聞  
 きて、「さりとは思ひかけざりき。そは珍しき客人なり。對面せ  
 ずば悔しきこともあらん。こなたへ」と申せ」とて、やがて面を  
 會はせけり。君平深く歡びて、事の趣つばらに語り出づるに、  
 蘆庵ひたすら感歎して、「足下は得がたき學士なり。さる志な

さりとは—  
 思ひかけざ  
 りき

らんには、わが庵に杖を留めて、こゝらあたりの陵を、靜に探  
 求し給へ」とて、また他事もなくもてなしけり。

一一一 小澤蘆庵と蒲生君平 その二

これより、君平は日毎に陵を訪ねめぐるに、ともすれば日  
 暮れて歸るを、主人はいつもみづから風呂を焚きて、入浴せ  
 さするを例とせり。君平、その心づかひを、心苦しとて辭みた  
 れど、「これらの事は、ひたすらに客を愛するのみならず、足下  
 の如き、國の爲に力を盡す人の疲勞を、聊なりともうち慰め  
 んの心のみ。必ず辭み給ふな」とて聞き入れず。かゝりし程に、  
 君平はある夜更闌けて、子二つの頃歸れるに、蘆庵はいまだ

更

午後八時より  
 午前六時まで  
 を、二時宛に  
 割りて、初更  
 (戌)二更(亥)  
 三更(子)四更  
 (丑)五更(寅)  
 の稱あり。

咳一咳

等持院  
禪宗。山城國  
葛野郡衣笠山  
の麓にあり。  
靈あらば一  
聞け

いねず。例の如く入浴せさせ、飯をすゝめ、さていふやう、われ  
足下を宿せる日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなし  
をばせざれども、老僕を憩はせんとて、手づから風呂をさへ  
焚くを、思ひ酌み給はずや。陵を訪ねめぐればとて、今までは  
用なからんに、道草食うてか、老人に物を思はせ給ふこと、心  
得がたし」と咳く。君平聞きて容を改め、翁のうらみ理なり。わ  
が非を飾るにあらねども、こよひかく更闌けたるは、いさゝ  
か故あり。懺悔のため笑に供へん。今日は某の天皇の陵をた  
づねたりしに、日暮るゝまでたづねもあはで、思はずも等持  
院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年頃のうらみ心頭  
に起りて堪へられず、墓に向ひて罵るやう、「梟臣尊氏、靈あら

干一干

ば、今いふことをたしかに聞け。汝が一旦治まりたる建武一  
統の世を亂して、逆に取り逆に守り、毒を後世に流ししより  
二百十數年、干戈收まらず、國の舊典もために焼け失せ、王室  
もこれによりて衰へ、歴代帝王の山陵すらも迹なくなりて、

名可月  
ぬいたるの髪やよき秋のよれ  
月夜にのほほはれ 志尾

われらにさへ飽くまで物を思はするは、皆これ汝が罪なり。  
天罰思ひ知るべし」とて、杖をもて、石塔を思ふがまゝにうち  
敲きぬ。かくて、寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道の  
邊の酒屋に立ちより、怒に任せて飲みし程に、六七合を罄し

うまいやしけん

靈山

京都の東山にあり。

長嘯子

木下勝俊、秀吉の室北政所の兄の子、伏見の戦後、出家して東山に蟄居し、長嘯子と號す。

伏見籠城

慶長五年七月。

鳥居元忠

徳川氏の忠臣。

たりき。さて、酒屋をば出てしかど、酔ひて足も定まらず。このまゝにて歸らば、必ず翁に叱られん。半ば醒して行かんと、株に尻をかけしより、うまいやしけん、驚き覺むれば、早更闌けたり」と語るに、蘆庵は呵々とうち笑ひ、さても、世には似たる馬鹿者もあるものかな。吾も、去にし年、一日靈山の邊に逍遙して、長嘯子の墓所を過ぎし時、ゆきもえやらずにらまへて、『長嘯子不滅の罪あり。わぬし自らこれを知るか。わぬしは豊太閤の外族として、位高く采地も廣かるに、心さま武士に似ず、伏見の籠城に、敵の旗色に鬼胎を懷きて、鳥居元忠等を棄殺にし、且つ、事平ぎて後、罪を蒙り、纔に命をたすけられしを幸にして、恥を知らず、心にもあらぬ世捨人顔して、えせ歌多

毆一歐

とぞー(イフ)

浮島が原

駿河國駿東郡愛鷹山の裾なる須戸沼附近の原野。

大磯・小磯

相模國中郡、當今小磯は大磯町に併せらる。

鹽竈

陸前國宮城郡にあり。

く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調のわろくなりて、今に至るまで直らぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならん」と罵りながら杖を擧げて、墓を毆ちたることありけり。こはよく似たるにあらずや」と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹を抱へきとぞ。(瀧澤解一兎園小説)

一一三、白峯の陵

相阪の關守に許されてより、秋來し山のもみち葉見すごし難く、濱千鳥のあと踏みつくる鳴海潟、富士の高根の煙、浮島が原、清見が關、大磯・小磯の浦々、むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蜚が苦屋、佐野の舟橋、木曾

象瀉

羽後國由利郡象瀉町附近の海岸、昔八十八湖九十九島ありて奇勝の名ありしが、文化元年島海山の噴火の爲に埋没す。

佐野の舟橋

上野國羣馬郡佐野島川の渡。

木曾のかけ橋

信濃國西筑摩郡木曾川の上流、土地幽邃山水の奇勝多し。

仁安三年

六條天皇の時、一八二八年。

白峯

讃岐國綾歌郡松山村。

新院

崇徳天皇。

のかけ橋、心のとゞまらぬ方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葎がちる難波を経て、須磨明石の浦吹く風を身にしめつゝも、行きくゞて、讃岐の眞尾坂の林といふに、しばらく筈をとゞむ草枕遙けき旅路のいたはりにもあらで、觀念修行の便とせし庵なりけり。

この里近き白峯といふ所にこそ新院の陵はあれと聞きて、拜み奉らばやと、十月はじめつ方、かの山に登る。松柏は奥深く茂り合ひて、青雲のたなびく日すら、小雨そぼ降るが如し。兒が嶽といふけはしき嶺うしろに峙ちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、まのあたりもおぼつかなき心ちせらる。木立わづかにすきたる所に、土高く積みたるが上に、石を

白峯の歌  
みづのしづみの山に水は流して  
ゆきつゝいづれ人づかぬや  
新院

讀筆成秋田上

三かさねに疊みなしたるが、うばらかづらに埋れてうら悲しきを、これなん陵よと思へば、心もかきくらまされて、更に夢現とも分きがたし。

げに、まのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に大政きこしめさせ給ふを、百のつかさ人は、かく賢き君ぞとて、御言かしこみて仕へまつりき。近衛院に譲りましし後も、藐姑射の山の玉の林をしめさせ給ひしに、思ひきや、麋鹿の通ふ路のみ見えて、まうづる人もなき深山のおどろの下に、神がく

思ひきや  
神がくれ給  
はんとは

れ給はんとは萬乗の君にてわたらせ給ふさへ宿世の業といふもののおそろしくも添ひたてまつりて罪をのがれさせ給はざりしよと世のはかなきに思ひつゞけて涙わき出づるが如し。夜もすがら供養し奉らばやと陵の前の平かなる石の上に座を占めて、經文靜に誦しつゝも、かつ歌詠みてたてまつる。

松山の浪のけしきはかはらじを、

かたなく君はなりましにけり。

尙こゝろ怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけん。日は入りしほどに、山深き夜のさま常ならで、石の牀木の葉の袞いとさむく、神清み骨冷えて、物とはなしにすさまじき心

ちせらる。(上田秋成―雨月物語)

### 一四、京都

平生閑靜なる田舎に住む人は、時々繁忙なる都會に出て、人生活動の有様を見るべし。之に反して、東京・大阪等の熱鬧の地に家を構ふるものは、暇ある折々、平和なる自然の懷に入りて、勞を慰め氣を新にすべし。されど、明媚なる山川も、たゞ名所といふのみにては物足らず、古來の歴史に關係深き舊跡を訪ひて、風景を賞し由緒を懷ふこそ、旅行の樂これに過ぎたるはなかるべけれ。而して、その風景と由緒とを兼ね備ふる、我が國第一の勝地は京都なり。

懷  
懷

襖|懐

京都の地形は、座敷の南面の障子を開きたるが如し。三方は山の襖を立て廻らし、四隅は柱の如く、前に桃山と天王山とあり、後に比叡山と愛宕山とあり。淀川カハ・巨カ・椋池を前庭の泉水とすれば、男山は築山に譬へつべし。賀茂川東に流れ、桂川西に注ぎ、共に水色澄明にして、底の眞砂も數ふべし。東山は松の緑、目覺むるばかりに濃く描かれ、西山は淡霞一抹、ほのかに嵐山の櫻を見せたり。その山色水光、雨に奇に、晴に好く、四季の往來、朝夕の變化、一として佳ならざるはなく、嵯峨御室の花、通天・高雄の紅葉、とりどりに面白ければ、遊人そゞろに興に入りて歌を思ふ。

延暦十三年、桓武天皇始めてこゝに奠都し給ひてより、此

稍|梢

の地は平安京と稱せられて、千七十五年の間、わが國の帝都たり。都制は唐の長安に則りて規模雄大に、平安朝四百年は實に京都最盛の時期なりき。鎌倉幕府創立このかた、やうやう衰微し、應仁以後はわけて荒涼たる有様となり、皇居頽廢して、三條の大橋より内侍所の燈光を望むべく、又紫宸殿の前に茶を賣るものあり、兒童もこゝに寄り合ひ、縁の上に土をこねて遊ぶに、御簾を褰げて咎むる人もなかりきといふ。織田・豊臣二氏の時に至りて、稍、恢復の緒に就き、特に秀吉の手によりて都市の區劃を改正し、居民も安堵し、慶長以來、世の中の泰平なるに従ひて、市街は益々繁昌せり。明治二年、主上は東京の宮城に遷らせ給へど、即位の禮及び大嘗祭は、永く

興—興

この地において行はせ給ふことに定められたり。抑、これを既往に鑑るに、京都の地たる、金湯要害にあらず。古來これを守りて成功したるものなし。木曾義仲の如き、明智光秀の如き、これに據れる者の皆敗滅せるは、攻守の勢、おのづからその元氣を異にするが爲なるべしといへども、その難攻不陷の地にあらざるは、勿論なり。而して、更にその將來を考ふるに、地勢甚だ廣闊ならず、漕運の便をさへ缺きたれば、大いなる工業、盛んなる商業の此處に興起すべしとも思はれず。たゞ古代の遺蹟の饒多なるに、この地の價値は存するなり。蓋し、我が國の歴史の大半は、即ち京都の歴史なり。されば、到る處、農夫が耕す田圃も、學生がそゞろあるきする

ゲ—テ

獨逸の詩人。  
一七四九年生  
まれ、一八三  
二年歿す。

刹—殺

野路も、貫之、定家が舊跡、源氏、平氏の古戰場にして、そことも知らず、湮滅したるも、少なからねど、名家の遺蹟の今に残れるも、なほ多く、左顧右盼飽くことを知らず。昔、獨逸の文豪ゲ—テは、伊太利を巡遊してより、著しくその思想を豊富にしたりといふ。我が國の馬琴が、小説にその名を著せるも、京阪漫遊の後なることを思ふべし。日本に於ける京都は、實に歐洲に於ける伊太利の如し。

大社、巨刹の多きは、京都附近の特色なり。北には賀茂川に沿ひて、下鴨、上鴨の二社あり、南には男山に據りて、石清水八幡宮あり。平安神宮は桓武天皇を祀りて、碧瓦丹楹、人目を驚かし、賽人の最もおほきは、祇園、北野、伏見、稻荷等なり。天台宗

藍—籃

には叡山の延暦寺、四明の陰に隠れて見えぬ、眞言宗の東寺は高塔巍然として汽車の窓よりも望むべし。浄土宗の知恩院、眞宗の東西本願寺、日蓮宗の本國寺、臨濟宗の南禪、相國、妙心、大徳、天龍、東福等の諸寺、黄檗宗の萬福寺など、いづれも堂堂たる伽藍なり。清水寺は風景の美しきによりて、平等院は建築の古きによりて著る。

されど、京都は常に古代の遺蹟の饒多なるのみならず、美術・工藝の淵藪としても亦全國に冠たり。げにや、時代の鍊磨によりて成るべき精緻なる手工は、この地の如き歴史ありて、始めてこれを見ることを得べし。清水の磁器、西陣の織物、友禪染・刺繡・扇子・短冊の類は、他に匹敵するものなく、繪畫は

また東京と相竝んで互に優劣を争ふ。近頃京都大學の設立ありて、學問においても一方の中心となりぬ。既往の盛は將來の榮を促すべく、千年の舊都の今後の發達、蓋し刮目して見るべきものあらん。(藤岡作太郎の文による)

### 一五、桃山時代の工業

豊臣太閤の志を得るや、大阪城をはじめとして、聚樂、桃山の兩第を建て、續々として大土工を起したりければ、これがために我が建築術の進歩したることは、實に少々にあらずりき。殊に桃山の建築は、文祿三年、かの十四萬の大兵を指揮して、遙に韓の八道を蹂躪せし折にして、太閤の最も得意の

桃—挑

文祿三年

後陽成天皇の

時。二二五四

年。

韓の八道

京畿、忠清、

全羅、慶尙、

咸鏡、平安、

江原、黄海。



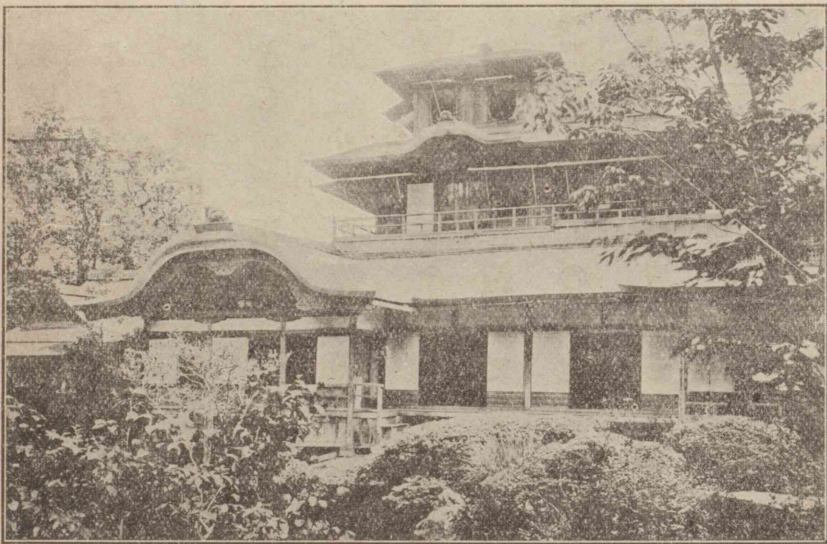
時に當りければ、彼が豪邁の氣象は、自らその建築彫刻の上にもあらはれたりき。

桃山の建築につきては、今詳にこれを考ふべからずといへども、瓦の端を黄金にて塗り、百間の廊下に黄金の燈籠を釣りたりきなどいへば、その壯觀まことに想ふべきなり。山城近江の邊には、桃山の式を承けて建築したりといふ寺院、今も存せるものありて、その式皆一定せり。たとへば、長押、鴨居を黒漆にて塗りて、その上に蒔繪をほどこし、又、襖をば黄金にて張り付けたるが如き類にして、これ、即ち、當年の太閤が意匠に出でたるものなりといふ。

太閤は、これらの建築彫刻等に意を用ひしのみならず、ま

釣鈎

筑紫



本願寺飛雲閣

た、茶器の類より、衣服調度の類に至るまでも、あまねくその意匠を凝らして、自らこれを工人に授けたりといふ。かの筑紫の陣中において、征韓の軍を指揮せし時すらも、常におのが意匠を日記に圖して、これを京都に送り、以て茶入を焼かしめ、蒔繪を描かしめきとぞ。

銳鈍

かくの如く、太閤は常にその意を工藝の上にそゝぎて、銳意これが獎勵をつとめたりければ、京都・伏見の間には、名工續々輩出して、一時工藝の隆盛を極めたり。

その後、豊臣氏滅びて、徳川氏の世となりしより、京都・伏見に居住せし豊臣氏恩顧の工藝家は、散じて二となりて、一は江戸に入り、一は加賀に入りぬ。江戸に入りしものは、その後、社會の變遷に遭ひて、全く桃山の遺風を失ひしかど、その加賀に入りしものは、北陸の別天地にありて、こゝに蒔繪・金屬彫刻の美術・工藝を起し、加賀蒔繪・加賀象眼の名は、大いに世の賞玩する所となりて、長く桃山時代の遺風を傳へぬ。

(横井時冬―日本工業史による)

陸陸

法隆寺  
大和國生駒郡  
法隆寺村にあり。

春日神社  
大和國奈良にあり。

### 一六、古社寺と國寶

天然界の一木一石も、史上の遺蹟としては、觀る者をして懷古の情に禁へざらしむ。況や當時の名匠を集めて經營せる古代建造物をや。法隆寺の境内に佇みて、昔ながらの壯嚴なる堂塔・伽藍に對する時は、何人も聖徳太子が銳意佛法の弘通に盡し給ひしそのかみを想ひ出でて、一種無限の感に打たるゝなるべし。去つて春日神社に詣づれば、樓門・神殿・廻廊等、丹朱の色鮮に、鬱蒼たる老杉と相映じて、平安時代の優雅なる氣象、自ら眼前に開くる心地す。京都に、鎌倉に、其の他全國處々に遺存せる古社寺の建造物はもとより、其の襲藏

せる繪畫・彫刻・文書・什器等の名品は、皆能く其の時代を語るものにして、人をして皇國文明の由來の深く且つ遠きを想はしむ。

これを諸外國に徴するに、是等の建造物及び遺物の豊富なること、我が國の如きは比類殆ど稀なり。これ畢竟我が國體と民性との然らしむる所にして、其の我等國民に與ふる教訓は、實に至大なるものありと謂ふべし。然れども、是等は能く幾多の星霜變故を経て、纔に今日に遺存せるものにして、其の既に壞廢散佚せるものに至りては、擧げて數ふべからず。かくて國民の誇たるべき貴重なる建造物及び寶物も、保存の法宜しきを得ざる時は、終に絶滅に至るの虞なしと

纔・讒

せず。これ明治三十年、古社寺保存法の公布ありし所以なり。古社寺保存法によれば、古社寺の建造物及び寶物類中、歴史の證徴となり、特殊の由緒あり、又製作の優秀なるものは、國費の補助によりて保存せられ、その最も顯著なるものは、特別保護建造物及び國寶の資格あるものと定めらる。爾來この法によりて指定せられたる、現在の保護建造物、國寶、合せて三千餘點に及べりといふ。

明治の初年には、西洋の文物を輸入するに急にして、我が國古來の遺物を顧慮する暇なく、我が名工一代の傑作にして、海外に搬出せられたるもの少なからざりき。今や國民が其の過去を知り、過去の文物を尊重するに至れるは、國民と

傑・磔

しての自覺の精神を發揮したる者にして、國家の爲慶福に堪へざる所なり。大國民たらん者は、須らく物質的文明の進歩に後るべからざると同時に、一面には、古代を回顧するの尙古的精神を有せずんばある可からず。(高等小學讀本による)

一七、月の洞庭湖

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に建つてゐる三層樓である。幾百年の星霜に黒ずんでゐる城壁の甃瓦の上に、建て直してまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として輝いてゐる。その色彩の配合が極めて美觀である。

船を捨てて上陸すると、岸邊の小屋がまた珍しい。蘆のま

岳州府  
支那湖南省

范文正公が  
記

范仲淹の岳陽樓記の中に、  
「衡山、遠山、香、長江、浩々湯湯、横無二際、溼、朝暉夕陰、氣象萬千、此則岳陽樓之大觀也。」

ろ屋とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた低い家である。その小屋の間を通りぬけて、高い石段をあがり、城門をぬけて岳陽樓へ上つた。さて、案内の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀んで、三層樓の上にあがつた。かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り、世は遷つても、その所謂大觀には變遷がない。唯見る、浩々湯々として、洞庭湖は目の前に天然の大畫幅をひろげてをる。湖の門戸には、彼の堯の女湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左にある。いづれも江の島位の大きさの島で、さながら洞庭宮を守る獅子、狛犬の如くである。其の眞中に、今や夕日は落ちようとしてゐる。天地の大觀に見とれて、覺えず我を忘

れて居たが、促し立てられて船へ歸つた。

幸に風は追手、船は帆を張つて愈、洞庭湖の中に入らうと

する。夕日は二つの島

の間に落ちて、見る見

る紅の眞玉が湖心に

沈む。顧みれば、岳州府

城の上に月は已に昇

つて居る。洞庭八百里、

月照岳陽城といふ詩



岳陽樓

瀟湘八景  
平沙落雁。遠

の通りである。日を數ふれば十二月三日、恰も舊曆十月十五日の夜である。瀟湘八景の洞庭秋月ではないが、望月の夜、洞

浦歸帆。山市晴嵐。江天暮雪。洞庭秋月。瀟湘夜雨。煙寺晚鐘。漁村夕陽。

庭を過ぎるとは、何といふ好因縁であらう。

夕日は遂に湖心に沈んだ。其餘光が空に輝くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、畫にも寫しがたい麗しい中を、遙に一帆、又一帆、風のまに、遠く、近く、かつ顯れ、かつ消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだならばと思はれるくらゐ。

美しかつた夕映も光を失つて、湖の上はだんく薄暗く

なる。月は愈澄み上る。見えるものは唯黄金・白金の波。皓月千里、浮光躍金といふ有様である。廣い果知らぬ湖の上、進み行

く我が船の近くに二三の釣舟が居る。昔、卓彦恭といふ人が

皓月云々  
岳陽樓記の句。  
卓彦恭  
宋の人。傳闕

洞庭を過ぎた時、月下に釣せる小舟を呼びとめて、「魚ありや、否や」と問うたのに、老人らしい聲で、「魚はないが詩がある」と答へた。卓喜んで、願はくは一篇を聞かんといへば、老人柩を鼓つて、

八十滄浪一老翁。 蘆花江上水連空。

世間多少乗除事。 良夜月明收釣筒。

と高吟し去つたといふ。さる風流の漁翁のありやなしやは知らぬが、二三の小さな釣舟は、たしかに大いなる湖の月夜の景趣を添へるのであつた。

月は良く、風は追手、船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける。月は愈澄む。此の意人の譏るなし、いひしらぬ樂し

頂一頂

さ寂しさ、何ともいひ難き感が胸に充ちて、吾が身そゞろに我あるを忘れて、此の隈なき月と果なき湖とに對して居た。一、昨年の初秋、富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の月。これは山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じあはれて、風月の縁に富むことを天に謝したことであつた。(佐々木信綱)

一八、 筆の歌 (武島又次郎)

月花めづるみやび男が、

向ふつくゑの紙のうへ、

走ればやがて歌成りて、

星照り、日出で、鳥うたふ。

倚—椅

天地ゑがく繪だくみが、  
倚るやみなみの窗の下  
動けば躑て晝は成りて、  
水落ち、木生ひ、草あをし。

衝—衝

壯心鬱勃天を衝く、  
英雄の手に觸るゝ時、  
落筆のもと龍蛇とび、  
雲煙くらく地をおほふ。

慨—概

慷慨淋漓怒髮立つ、  
志士の腕に執られては、  
片言隻句鬼神泣き、  
哀音ながく世につたふ。

功成り、名とげ、業卒へて、  
身は棄てらるゝ竈の中、  
煙と化して消ゆれども、  
うらまぬ筆の心清しや。

一九、 わが家の富

誰かいふ  
陋なりと

家は十坪に過ぎず、庭はたゞ三坪。誰かいふ、狭くして且つ陋なりと。家陋なりと雖も、膝を容るべく、庭狭しと雖も、碧空仰ぐべし。

神の月日は此處にも照れば、四季も來り見舞ひ、風雨・雪霰かはるゝ、到りて、興淺からず、蝶兒舞ひ、齊女吟じ、春禽遊び、秋蟲鳴く。靜に觀ずれば、この世の富は、殆ど三坪の庭に溢るるを覺ゆ。

李一季

奥一曳

庭に一株の老李あり。春三月の頃となれば、青白き花開いて枝に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より、白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾にして雪を散ず。隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花わが庭に墜ち、紅雨霏々

白雪紛々たり。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の梔子の花あり。皐月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花のわが家に開くは宜なりけり。

老李の後に、一株の碧梧あり。その幹亭々として聳え、わが如く直かれと教ふるに似たり。手水鉢の側なる芭蕉と共に、その葉闊うして、わが家の雨聲を多からしむ。

つくづくぼうしの聲に、世は何時か秋に入れば、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、唯一株、前の家主の植ゑ遣したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しといふとも、秋のあ

いふとも  
あるべし



翻一翻

詰一詰  
コ  
コ  
コ

はれ寂びたる趣は、卻てわが庭の一枝にあるべし。

屋後に一株の公孫樹あり。秋深くして、滿樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、扇のごときその葉、翻々として翻り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜の中に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人はいふなる錦を、われは庭に敷き詰めぬ。

木の葉落ち盡しては、流石に寂しげなれども、日影・月影いよ／＼多くなりて、空を見、星を見るに障少なきは嬉し。

(徳富健次郎「自然と人生」)

### 二一〇、動植物配合の美

自然界に生育する動物と植物との間には、或は必須、若しくは偶然の原因に由りて、おのづから離るべからざる關係を有するが如く思惟せらるゝもの少なからず。これを研究するは、博物學上最も興味ある事なるのみならず、文學・美術の上にも亦有益の事なるべければ、聊か諸子の爲にこれを語るべし。

蜜一密

昆虫は花の蜜に養はれ、花はまた昆虫の媒介によりて、花粉の傳達を受け、その實を結ぶもの多ければ、兩者間の關係の至りて親密なるは、素よりいふまでもなし。

昆虫以外の動物と植物との關係は、さほど密接ならねど、

啄木鳥 キツツキ

啄 ツツク

啄 ツツク

啄 ツツク

ものなれば  
異ならざ  
るなり

また、種々の原因によりて、おのづから配合の妙あるもの少  
なからず、黄熟せる稻田に雀の羣集する、青々たる麥隴に雲  
雀の下り居るなどは更なり。果實の赤らみたる枝に、鳥のと  
まりゐて、これを啄まんとする、また、椋鳥・鶇・栗鼠・貂などの、木  
の實草の實を取り食ふは、人のよく知る所にして、即ち、これ  
らの動物と果實とは、また一種の關係ありて、動物に果實中  
の甘味を與へ、その種子を諸處に分布せしむるものなれば、  
その關係は、花と蟲との關係に異ならざるなり。

かゝる必須の關係にあらざれども、鷺の柳蔭にいこひ、螢  
の浮萍に宿り、雨蛙・蝸牛等の水邊植物の葉莖にすがり、また、  
池中に生ひたる蒲莞・燈心草などに、赤蜻蛉の時々來りてと

魚 イサナ

まるなどは、水または濕地を好む動物の、水邊植物を利用す  
るものにして、また、雁鴨の蘆洲に下り、鯉・金魚の金魚藻・黒藻  
などの間を遊び、水黽の蓴菜・萍の漂ふ水面を走る等は、皆、水  
中または水邊の植物と、自ら配合を有するを知るべく、昆布・  
荒布の生ひ出でたる波間を、魚蝦の往來するも、亦一種の奇  
觀といふべし。

鳥類が種々の植物の中に巢を造るは普通の事にして、中  
には、ある特別の樹木をのみ選びて造るものもあり、またあ  
る樹木には、或種の鳥のしばしば來るを目撃し、又、ある鳥  
の來る時季とある植物の花もしくは實のある時季と、相一  
致するが爲に、偶然にその鳥と植物とを合はせ見る機會多

隨一墮

く、隨つて、その間に一の聯想を起すが如き類も少なからず。從來わが國の詩歌繪畫に現れ、また他の美術・工藝品の上を用ひらるゝ、梅に鶯、松に鶴、枯木に烏、柳に鶯などの對は、これら動植物の性質・形態の、おのづから適合する所あるが爲なるべけれど、また前述の如き原因によりたる事は疑ふべからず。

其の他、雉・山鳥の灌木の叢に巢くひ、鶉の尾花の蔭に隠れ、雉の花園の間に緩歩するが如き、さては、荒野の狐、深林の熊、狼、高山のはひ松と雷鳥との如き、また、熱帶地方の椰子、紅樹の茂生せる河邊に鰐の眠りたる、印度の山野の藪中に虎の潛みたる、サハラ沙漠中の小灌木下に獅子の蹲れるなど、い

埃一埃

づれも、その所に應ずる兩界自然の配合にして、兩者互に相俟ちて、始めてその天然の特性を發揮するものといふべし。かくの如くなれば、苟も畫家・文學家等の、自然界の美を顯さんとするものは、須らくこの間の消息を考察せざるべからざるなり。(三好學—植物學講義による)

### 一一一、狩野芳崖

維新の際、英邁の士多く防・長の間に出で、政界はいふに及ばず、畫界にもまた、森寬齋・狩野芳崖等の名家あり。特に芳崖は明治繪畫の基礎を立てたる斯道の恩人なり。芳崖は、世々畫を以て長州豊浦藩に仕へし家に生まれた

森寬齋  
京都の畫家徹山の養子となり、四條派の畫を善くす。明治二十七年歿す。年八十。  
豊浦藩  
長門豊浦郡府中、毛利元周の知所。

狩野勝川  
 名は雅信、江戸の人。法印に叙せられ勝川院と號す。明治十三年歿す。年五十八。  
 橋本雅邦  
 初の名は長郷。又勝園と號す。明治四十一年歿す。年七十三。

狂一狂

り。年壯にして江戸に出て、狩野勝川に學ぶ。勝川は幕府の繪師にして、その家塾には、多くの子弟を教へたり。されど、當時繪畫の道久しく振はず。師弟いづれも古風を墨守して、清新の氣に乏し。芳崖その間に出て、橋本雅邦と共に、同門の獅子王と稱せらる。芳崖は性不羈にして、尋常の繩墨を以て律せらるべくもあらず。意の往くまゝに筆を縦にすれば、諸生は目して狂人とし、勝川もこれを厭へども、如何ともするのと能はざりき。

幕末の世、國事多端にして、藝術の士は、容易にその職に就くことを得ざりしかば、芳崖は空しく郷里に歸りぬ。されど、防長の地は紛擾最も甚だしく、芳崖も亦筆を抛ちて、銃砲鑄

祿一錄

造の事に従ひぬ。明治の世となりて後は、家祿を奉還し、養蠶製絲の業を始めたれども、幾ばくもなく失敗して、一家の窮乏いふばかりなかりき。

渾一揮



狩野芳崖肖像

維新の變は、延いて萬般の事に劇變を生じ、國民はすべて物質的文化の改善に忙しくして、藝術の如きは、愛玩の暇なければ、畫界も渾沌たる有様にて、纔に文人畫、西洋畫などの喜びある、あるのみ。有爲の畫家も、或は官に雇はれて器械畫をかき、或は少許の賃を得て友禪染の下繪を作り、すべて生活に

困難を極めたれば、斯道の光明は、いつ輝くべしとも覺えざりき。

明治十二年、芳崖は意を決して再び東京に出て、人の勸によりて、五十幅の畫を作りしかど、表装の價すら拂ふものなく、久しく大道の露店にさらしたる果は、田舎めぐりの道具屋に賣りて、僅に三圓の金を得たりといふ。ある時は、砲兵工廠の圖案課に雇はれんとして、試験に落第し、ある時は陶器の下繪をかきて、少許の日給に飢を凌ぎしこともあり。その上に病をさへ得て、一家の窮乏は益甚だしく、譬ふるにものなかりき。

幸に、舊友雅邦が、島津家より犬追物の繪卷物の依頼を受

島津家

舊鹿兒島藩主  
島津公爵家。

舎一舎

謂へらく  
職分なりと  
誇一誇

けて、それを芳崖に譲れるあり。芳崖はこれによりて、一時餬口の道を得たり。されど、その妙技は未だ世に顯れず。明治十五年、第一回繪畫共進會の開かるゝや、その畫く所の畫一幅を出ししが、更に世人の注目を惹かざりき。その不遇眞に憐むべし。されど、偉人は艱難に遭ふ毎に、益猛進するものなり。芳崖謂へらく、「美術は一國人文の粹にして、繪畫は又美術中の主なるものなり。これを振興せざれば、未だ以て文明を誇るに足らず。繪畫の振興を計るは、實にわが職分なり」と。

當時、國民は歐米の文化に心酔して、古來の藝術を蔑視し、動もすれば、曰はく、「日本畫は色彩の種類少なく、その法も拙ければ、到底彼の油繪に敵すること能はず」と。芳崖曰はく、「こ

捉ト促メ

れ能はざるにあらず、爲さざるなり。疑ふものは余が畫を見よ」と。即ち工夫を凝らして、執金剛神の鬼を捉ふる圖を作れり。設色の巧、千變萬化、燈光錦帳に映じて、金碧燦爛たり。見るもの愕然として、その妙技に驚き、繪畫の革新期して待つべしとせり。

芳崖みづから繪畫に勵むといへども、己の志を繼ぐものなからんには、死後の遺憾これに過ぎじ。學校を設けて子弟を養ふは目下の急務なりとして、その設立を計れり。適、伊藤公その畫を見てこれを愛し、書を裁して芳崖を招く。芳崖喜んで曰はく、「機至れり」と。乃ち公の邸に至る。公偶門を出でんとす。芳崖その袂を控へ留めて曰はく、「政治には閣下あり。繪

伊藤公  
公爵伊藤博文

閣下カクカあり

播ヒ種ク

事には芳崖あり。繪事については閣下もわが言に耳を傾けざるべからず」と。滔々として説くこと數時間に亙りぬ。かくて、明治廿一年十月、政府は東京美術學校の設置を決し、芳崖をしてその日本畫の主任たらしめぬ。

惜しむべし、芳崖は播種せしのみにして、未だ秋收を見るに至らず、開校に先だちて病急に重く、十一月五日、六十一歳にして歿しぬ。絶筆は、慈母觀音の圖にして、その粉本と共に美術學校に藏す。端麗なる菩薩の尊容、仰ぐべく拜すべし。苦心凡そ一年、死するの前五日その業を了へぬ。かくして、絶世の偉人は、一生悲境に苦しむたりといへども、明治の畫界はその指導によりて振興せり。芳崖もまた地下に瞑目すべき

なり。(藤岡作太郎の文による)

一二一 天津風

平野國枝

天津風吹けよけの旗乃手に  
なまぬ羊を河に

梅田雲濱

君の代をたまたま此を  
あつたあつたと思ふ

武田耕堂

さらば  
くらへむ  
さらば  
くらへむ

我もう記したるぬ日はな

僧月照

大君のふみきたる惜し  
清摩の漱石を

有村蓬子

山は彌子かきうたを  
とまらしたる月の月

一二三 馬關砲撃

文久三年の四月二十日に詔敕が出て、五月十日を以て攘夷期限とすることになった。伊藤公井上侯等の初めて洋行

井上侯  
侯爵井上馨

下ノ關  
長門國豐浦郡赤間が關といふ。略して馬關とも稱す。

三條公以下七卿  
三條實美、三條西季知、東久世通禧、四條隆調、錦小路頼徳、壬生基修、澤宣嘉の七人なり。

したのは、丁度この頃であつた。攘夷期限も已に定まつたから、長州では下關海峡通過の外國船を數回砲撃した。それのみならず、長州の建議に基いて、御親征といふことが發表された。幕府の方では、元來攘夷の主義ではなかつたから、假令詔敕が出たとて、直に砲撃を實行するは不都合であるとの議論であり、且つ、御親征といふことにも、公卿の多數が不同意であつたため、遂に長州は勅勘を蒙つて、京都を引き拂ふといふ騒となり、三條公以下七卿は、長州人と共に、京都を引き揚げて長州に下つた。これが所謂七卿落である。

長州では、元來朝廷の御趣意を遵奉して盡力したのに、事の茲に至つたのは、勿論大不服で、種々雪冤の運動をしたが、

聽許されなかつたらば  
一拂はう

來島又兵衛  
名は正久、萩藩の士。

會津  
徳川氏の親藩  
松平容保。  
桑名  
徳川氏の親藩  
松平定敬。

事が容易に行はれない。遂に、翌元治元年の六七月に及んで、若し歎願が聽許されなかつたらば、進んで君側の姦を拂はうといふ手段を取る事になつた。この事に關して、最も急激の論を主張したのは、遊撃隊の總督來島又兵衛であつて、彼は早くも遊撃隊を率ゐて、京都方面に出發した。伊藤公井上侯等が、國事に殉する覺悟を以て、急遽歸朝したのは、丁度この混雜の最中であつた。

當時、長州は、京都方面に於いては、幕府方の隨一たる會津桑名を當の敵として、將に大事に及ばんとし、下關方面に於いては、英・佛・米・蘭の諸國が、聯合艦隊を以て不日攻め來らんとし、所謂前門の虎、後門の狼といふやうな、極めて切迫の場



危一厄

合であつた。公等は、大危険を冒して山口に入り、藩に向つて大いに攘夷の無謀なることを論じ、攘夷は止めるといふ返答を各國公使にせねばならぬ。又、京都に兵を出して居つて



高杉晋作肖像

も、成功はむづかしい。寧ろ之を呼び下し、防長に割據して、徐に天下の形勢に乗じて、鋒を勤王の一途に向くるに若かずと主張した。

藩主  
毛利慶親

遂に御前會議までもあつたが、その説はなか／＼行はれない。公等は攘夷派の壯士のために附け狙はれて、今にも暗殺されようとした。公等の熱心は、藩主及び當路者の心をば大

分動かしたけれど、藩内の形勢は、實に攘夷論に熱中して居て、騎虎の勢如何とも出来なかつた。

併し、雙方同時に事が起つては、到底その力に堪へない。まづ京都の方が焦眉の急であるといふので、とにかく各國艦隊の襲撃は、暫く猶豫させる手段を取る外はないと、藩で決定した。そこで、前年來長州の砲撃は、畢竟天子の救命を奉じた爲であるによつて、今一應京都の叡慮を伺ひ奉り、和戦いづれとも決定するつもりであるから、返答を今より三個月間待つてくれよと云ふ趣意を以て、公等を姫島の英國軍艦に遣り、返答させることになつた。公等は、かやうな曖昧な返答は、勿論不服ではあつたが、結局その事を傳へに往つた。し

姫島  
豊後國國崎郡に屬す。國崎半島の北、岐部より三海里にあり。

久坂義助

名は通武、玄瑞と稱す。後義助と改む。萩藩の醫官。

入江九一

名は弘毅、變名して河島小太郎といふ。萩藩の士。

寺島忠三郎

名は昌昭、刀山と號す。萩藩の士。

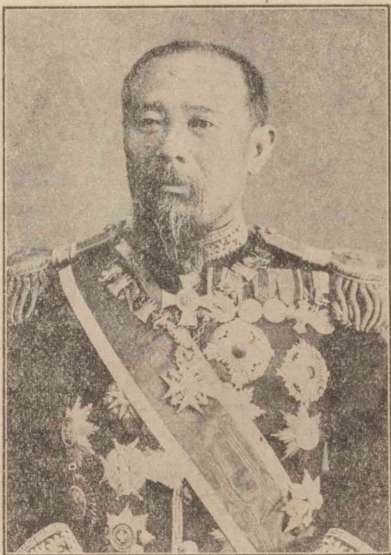
眞木和泉

名は保臣、筑後の人、久留米水天宮の祠官。

甲子の變

實に元治元年七月十九日なり。

かし、各國側て之を承諾しよう譯もなく、姫島の英國軍艦は、烟をあげて横濱へ向つて歸り去つた。とかくする中に、京都では既に事が破裂して、長州兵は大敗し、來島又兵衛、久坂義助、入江九一、寺島忠三郎、眞木和泉などの諸名士は、この時、京都又は山崎邊で、或は討死、或は割腹して、悲惨の最後をとげた。是が即ち



伊藤博文肖像

元治甲子の變である。

右の如く、京都では長州軍が敗北して、殘兵はおひくく歸り來るといふ始末であるから、已に船に乗つて出かけて居

世子  
毛利元徳。

三田尻

周防國佐波郡。

姿一恣

松島剛藏

名は久誠、初瑞益と稱す。萩藩の醫官。元治元年十二月斬らる。

た世子も、五卿も、途中から引き返して來るといふ大騒であり、又、一面には各國の聯合艦隊がいよゝゝ不日下、關に襲來するといふ急報が、長崎から來たので、藩士は山口から三田尻に出て、途中から引き返した世子を待ち受け、三田尻で大評定をひらき、ともかくにも各國とは和睦するがよいといふことになつて、藩主父子は山口に歸られた。まもなく、各國軍艦ははや姫島にその姿を顯した。そこで、公は藩主の命により、各國軍艦に談判に赴くことになり、松島剛藏と共に、三田尻から小船にて姫島に向つたが、各國軍艦ははや烟を立てて、下、關方面に向つて進行したので、小船で跡を追うても、間に合ふ譯はないから、途中から引き返した。これより、遂

高杉晋作  
名は春風、東  
行と號す。萩  
藩の士。

に聯合艦隊の下、關砲撃となり、これ亦長州兵の大敗に歸し、結局、高杉晋作及び公等が、主なる働き手となつて、和睦條約を結ぶことになつた。(末松謙澄—孝子伊藤公)

### 二四、尊王論の起因

斥—斥

源頼朝幕府を鎌倉に開きてより、文教漸く地を拂ひ、武力のあるところ、即ち權力のあるところとなり、朝威日に衰へぬ。然れども、これもとより一時の變態に過ぎず。世治まり、文教盛んなるに至れば、人々正理の何物なるかを辨へ、漸く尊王斥霸の心を生ずるは、理の當に然るべきところなり。徳川家康が天下を平定せしより、主として文教を奨勵し、

伐—代

遂に—至れり

殺伐粗暴の人心を調和するに、人道禮義の教を以てしたるは、もとより徳川氏の根基を固めん政策に外ならざりしかども、文教愈盛んなるに至りては、王朝の盛時を追懷するもの、武門政治のわが國體を傷ふを憤るもの、幕政の抑壓を屑しとせざるものなど、漸く現れ來りて、尊王論を唱へ、遂に幕府を倒すに至れり。而して、尊王論はおもに水戸光圀の大日本史に本づく。

光圀が大日本史を編するや、彰考館を設け、廣く知名の學者を聘して、其の任に當らしめ、自らこれを監督せり。その書は、治亂興亡の迹を殺せる一部の歴史に過ぎざれども、中に春秋褒貶の微旨を寓し、大義によりて名分を正し、神功皇后

春秋  
魯の史記の  
名。孔子の筆

削にかゝる。上下の名分を明にし、周の王室を尊ぶ意を寓す。

高山彦九郎

上野の人、名は正之。寛政五年久留米にて自殺す。

蒲生君平

下野の人、名は君實。高山彦九郎、林子平と共に、寛政の三奇人と稱せらる。

頼山陽

安藝の人、名は襄、山陽と號す。京都に住み、文名世に高し。

日本外史

二十二卷、源平二氏より徳

を皇妃傳に列し、弘文天皇を本紀に掲げ、吉野朝を正統としたるが如き、又、別に將軍傳を立てて、君臣上下の分を正したるなど、謹嚴なる筆法は、亂臣賊子を懼れしめたり。光圀深く皇室を畏敬し、毎歲元旦には、必ずまづ西に向ひて宮闕を遙拜したりといふ。また、楠木正成の遺烈を慕ひ、碑を湊川に建て、嗚呼忠臣楠子之墓と題せり。かの高山彦九郎・蒲生君平等の勤王説の如き、いふまでもなく、系を水戸派に繋ぎたるものにして、頼山陽の日本外史も、亦その流を汲めるもの以外ならず。かくの如くにして、尊王の大義精神は、蕩然として、人心を根柢より刷新し、大いに志氣を喚起せり。光圀、また、難波の僧契沖をして、萬葉集を註釋せしめたり。

川氏に至る武家の歴史。

契沖

俗姓下河氏、著書甚だ多し。

萬葉集

二十卷、我が國最古の歌集。

荷田春滿

京都稻荷社の祠官。

賀茂眞淵

遠江の人、田安宗武に聘せらる。縣居と號す。

本居宣長

伊勢の人、鈴の屋と號す。

平田篤胤

出羽の人、氣吹通舎と號す。

契沖は夙に古代の典籍を研究して、その造詣淺からざりきと雖も、その從事するところは、なほ古文辭の學に止まりしが、同時に、京に荷田春滿あり。淳良なる上古の風を儀表として、現代の弊習を矯めんとし、國史・律令を學び、上世の制度・習俗を究めて、國民の特性、固有の大道を闡明してより、水戸派とは異なる見地に立てる國學者派の尊王論を見る因を成せり。

その門人賀茂眞淵が、帷を江戸に垂るゝに及びて、その學海内を風靡し、本居宣長は、學者が内外本末の序を誤りて、大義名分のすたれたるを慨き、平田篤胤は、上世の墜緒を尋ねて、皇國の大道に恢復せんとする等、その論ずる所、或は國體

を主とし、或は神道を説き、或は古學を論じ、漸次に國民をして古傳の尊敬すべきを知り、天皇神權の名實一ならざるべからざることを、深くその腦裡に印せしめたり。維新の勤王家に國學者の多かりしも、亦故ありといふべし。

明治維新の本づくところ、その因一ならずと雖も、光圀が開きたる史學と、勃興したる古典學とは、その最も主なるものにして、輒く王政復古の大業を成就せるは、實にこれらの學者が主唱したる尊王論の賜なり。(落合直文—中等國語讀本)

二二五、岩倉公の逸事 其一

月日の小車はめぐりめぐりて、流るゝ水よりもはやく故右

故右府公  
右大臣岩倉具

視。明治十六  
年七月廿日薨  
ず。  
置かてやは  
一(アルベ  
キ)

府公の世を去り給ひしより、今ははや十年あまりぞ過ぎぬる。大詔のまに、わが國を富嶽の安きに置かてやはと、思ひ入り給へる公の一筋の誠心は、天地の間に充ちわたりて、極みなき後の世まで語りつき聞きつぐべければ、今更にいふまでもなき事ながら、公の逸事の二三を、思ひ出づるまゝに書き記して、後の鑑ともし、史人の料にもせんとす。

維新のはじめに、神武の古に復るといふ大義を定められしは、この公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の説に、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳にその人なきによれり。源親房卿は學識ありて、時の帝の御おぼえもめでたかりしかど、その人の所見は、延喜天曆の跡に復るにありて、神武

野々口隆正  
石見の人、國  
學者。

源親房  
家を北畠とい  
ふ。吉野朝廷  
の忠臣。



慶應三年十二月王政復古の大詔下る。

これぞ一遺したるなる

軍を廢し、内は攝關議奏傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を建てられたるは、實に公の輔翼の力なり。就中、復古の第三日に、禁闔に達文を掲げられて、女房の請謁を納るゝ事を痛く禁止せられたるは、これぞ、積年の宿弊を除き、將來のために一大美事を遺したるなる。とて、公の晩年に親しく物語し給ひき。この一事は扇の要なりとは、知る人ぞ知らん。

夙に抱きぬ

玉松操は一の偉丈夫なりき。平生、聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂とし、夙に神武復古の説を抱きぬ。偶、公に知られて、蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして畫策するところあり。公は玉松の功を推して、おのれの初年の

事業は皆彼の力なり」とまでのたまへり。薨去の前年に、一夕、ことさらに余を召して、玉松の履歷を物語したまひ、「その人の功績を空しくなせそ。書き記して、後の世のかたりつぎの料とせよ」と、懇に仰せられけり。この夜、余は他の二人を誘ひて俱に侍りしが、その中の一人は、もれなく公の物語を筆に留めたり。おのれの功を推して人に譲りたまふこと、大臣としていとめでたし。

その後、公の朝廷に勧めまゐらせて、斷然開國の國是を執らるゝに及びて、玉松は、「姦雄のために誤られたり」との一語をいひ放ちて、公の許を辭し、召さるれども更に應ぜず、一室に屏風を立て籠め、その中にて讀書に日を送りけるが、功を

召さるれども一應ぜず

大久保云々  
大久保利通、  
木戸孝允、小  
松清廉、廣澤  
眞臣。

論じ賞を頌つ日に逢はずして、世を去りぬるぞなげかはし  
き」と、公ののたまひし。公は蟄居していましながら、その家の  
裏の隠戸より、人知れず大久保・木戸・小松・廣澤等の諸名士を  
引き、内外の大勢を聞かれなどして、この時、すでに鎖國の非  
なることを悟らせられつるに、玉松は露ほどもこの事を知  
らざりけり。彼が口惜しく思ひつるも理なり。

一一六、岩倉公の逸事 その二

維新の後、公の翼贊の功は、明治の歴史と共に、後の世に傳  
ふべきなれば、こゝに書きつゞくる要をけれど、公はおのれ  
の勞を、露ほども誇りがほに人に語り給ふことをなかりし程

ことぞ多  
かめる

に、史人も得知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と  
二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にて、とな  
りし、かくなりしなど、事々しくいひはやせど、この事のおこ  
りは十五年にて、公は飽かず思し召すことありて、一方なら  
ず心を盡したまひ、そのをり、一たび中止とはなりぬ。されど  
も、公は深く秘め給ひて、文書一箱ほどもあるを、家に藏めて  
出さざりしかば、内々の人ならでは、知るものなかりき。これ  
等は後人の鑑にこそ。

剛膽は政事家の第一要徳なりとぞきこゆる。公は長袖の  
人とも覺えぬばかりに、剛毅の徳を備へおはしけり。征韓の  
議、今にも蕭牆の内に變亂を見んとせる時に、陸軍將校の中

征韓の議云々  
明治三年に議  
起り、同六年  
死と出征に決



せるを、公及び大久保木戸等、その不可を唱へて止めぬ。

にて武勇のきこえある一人は、公の邸に参り、客室に謁見し、一應二應議論の末、その人怒れる眼血をそゞぎ、毛髮倒に豎ち、長き脇差を、左の手にて鞘もたわむばかりに握りつめ、貴殿もし意見を枉げ給はずば、御身のためあしかりなんと、いひ放ちつゝ、膝と膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。この時、公の家の侍ども、次の間に控へ居て、障子の隙より窺ひつゝ、「あはや」と手に汗を握りたりしに、公はすこしも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ、内の人の物語りし。

御爲とならば—あらじ

公のかしこきあたりの御おぼえ殊にめでたかりしは、世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をおきて人は

汗—汗

君臣水魚  
蜀志に、「先主曰、孤之有孔明、猶魚之有水。」

あらじと思ひ給へる、隠さはぬ明き心の深かりしは、これぞ「君臣水魚」とも申し奉るべきか。雲の上の事は、筆に載するもかしこければ洩しつ。

西南の亂  
明治十年西郷隆盛等の亂。大久保卿の遭難

明治十一年五月、兇徒の爲に刺さる。

いかばかりか—思ふらん

公は大久保故内務卿と、神交特に深くおはしき、岩倉村蟄居の折より、大久保卿は密々往復しきりなりしが、「公の身の上心もとなし」とて、夜な夜な、年少き侍を遣して、守衛せさせつることありしを、公は知り給はざりき。西南の亂平ぎて後、兩公の間に契り給ふ事ありしが、日ならざるに、大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、「世の人、大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。維新のはじめの十年間は創業撥亂の時なりき。是より後の十年こそは、内治

を整理し、民利を進むる時なれとて、將來のために大に計畫するところありしに、料らずもかたみの言葉とはなりぬ」のたまへり。

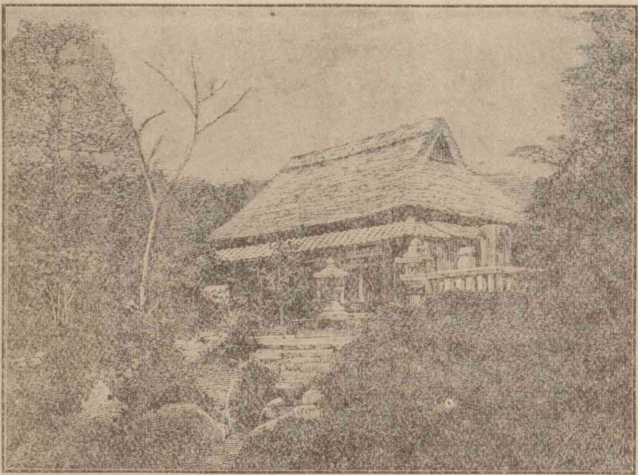
公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又、厚く國體の基礎を重んじ給ひ、晩年、公の奏上によりて、宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを、世に知らせん爲のはからひとぞきこえし。

公は、勤儉の二字を大政の本として、輔弼に心をつくさせ給ひき。又、家を治むるにも、儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、岩倉村の蟄居の時をな忘れそとて、常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、後の世まで、守り

はからひとぞきこえし

な忘れそ

薨—薨



岩倉村の居家

文とせよ」とて、子孫に遺し給ひしが、その附録一篇は、専ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、おもき病の牀にまし〜つゝ、親しく旨を授けて、侍ふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは、七月十五日にして、薨去前五日なりけり。今はの際に遺言ありて、「おのれの墓石は、父君の墓石の寸法に準へよ」とありきとなん。

公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も暇あらせ

侍やある

給はざりき。朝五時前には目を覺し、「侍やある」と聲かけさせ給ひ、「今日は何某をば何時に召せ。次に何某をば何時に呼べ。又明日は何某に朝何時に來れ。何某に夕何時に參れ」と記して申しつかはせなど仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かくことに忙しかりきとぞ。

侵—浸

公の病に侵され給ひつるは、明治十六年の春なりしが、後より思へば、十五年の頃より、なにとなく、あらざらん後の世の心づくしの節々を、知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同じ年の冬、ある人の許に贈りたまへる書の末に、

ある人  
井上毅なり。

さりともと、かきやる浦の藻鹽草、

誰がおりたちて、かづきあぐらむ。

我こそ—示  
さめ

とありき。さきだつも後るゝも、世の習とはいひながら、御國の爲に行末を思ひやられし公の心こそ、いとあはれなれ。公の平生の仰に、「大臣たるものは、その身の進退によりて、節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ、口惜しきことなきはみなる。我こそ躬を以て人臣の標準は示さめ」とのたまひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げんことを思ひ立ち給ひしかば、同僚の諸卿が支へ止め參らせしをも聽き入れ給はず、「是非に」とて歎き請ひ給ひしかば、上には、忝くも誠ある意ばへを酌ませたまひ、聞き届けさせ、厚き惠の御救をさへ下し賜ひけり。かくと承りて、公は、さしにも重き衾を押し退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜

御救をさへ  
賜ひけり

幻—幼

謝しつゝ、急ぎ家の子等を召し集へられ、今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ、杯まゐれ」とて、酒を賜ひけり。人々歡の色をなしたりけるが、さて、その翌日に事重らせ給ひぬるぞかひなき。今はの際まで、夢幻の間にも、おほやけの事のみ心に掛けさせ給ひ、なからん後の事までも、人もて雲の上నికిこえ上げまゐらせられたりといふ。

余は—つゞけぬ

余は、本末の序もなく、思ひいづるまゝに書きつゞけぬ。あはれ、この文讀まん人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草を、いや繼々にかづきあぐべき丈夫の伴となりて、公の地下の靈を、百載の後にまで慰めよや。(井上毅—梧陰存稿)

載—載

二七、蘇武 (坪内雄藏)

風 颯々の 秋ふけて、

節旄 かるく、命おもし、

千里 萬里の 路越えて、

ふかく匈奴の 國に入る。

野邊の草木や、鳥の 聲、

聞く物の音も 見る色も、

いづれか夷の 物ならぬ。

思へば、遠く 來つるかな。

流れゆく水、おとたてて、

胸にうれひの 波たかし。

匈奴 蒙古地方に住する遊牧の民、西晋の世、劉淵その苗裔に出で、遂に天下の大患をなしたり。  
いづれか—物ならぬ

故郷母あり、雁鳴きて、  
 老の寢覺やいかならむ。  
 よしや、幾夜の草まくら、  
 旅寢の空に果てぬとも、  
 國家のために盡すべし。  
 君命おもく身はかるし。  
 かうと覺悟は定まりぬ。  
 使命つぶさに傳へつゝ、  
 匈奴の王に面接し、  
 蘇武は國書を呈しけり。  
 固より非道の王なれば、

窖窟

國書の旨意は聽かざれど、  
 挺身敵地に使せし、  
 蘇武が勇氣を惜しみつゝ、  
 或時、蘇武を召しよせて、  
 「降り仕へよ、しかあらば、  
 おもく汝を用ひむと、  
 説き諭せども聽かざれば、  
 國王大いに怒をなし、  
 蘇武を囚へて、荒山の  
 巖窖の中に幽閉し、  
 食を與へず、くるしめぬ。

頃しも、北風 雲を吹き、

寒さ 膚を つんざけり。

飢うれば氈毛を 雪に和し、

いのちを繋ぐ 料となす。

日數経れども、死なざれば、

夷等怪しみ、かつ怖れ、

此度は蘇武を 野に移し、

羊のむれをば 守らせて、

雄羊 孕む ことあらば、

放免せむと あざけりぬ。

覺悟はしても 無念さに、

眠られぬ夜も いく度か。

ひと夜雲なく 月澄みて、

秋ももなかの 空のいろ、

せめてはかくて ある事をと、

雁に託せし 筆の 跡。

かくて春去り、夏 來り、

また秋の風、冬 の 霜、

落葉 々々の かさなりて、

十有 九年、 ゆめの間や。

老いて屈せぬ 忠 節 を、

天助けてか、不思議にも、

雁の使のかひありて、  
たのしき便ぞ聞えける。  
國と國との和議成りて、

蘇武は赦され歸りしが、  
立ち出でし時の黒髪は、  
いつしか雪とぞなれりける。

雁利  
善  
のまより  
クフカイ  
クヤキ  
クヤキ

二二八、故事二則

一 塞翁が馬

塞上ニ近キ人、術ヲ善クスル者アリ。馬、故ナクシテ亡ゲテ  
胡ニ入ル。人皆コレヲ弔ス。其ノ父曰ハク、「コレ、何ゾ遽ニ福ト

弦一絃

鵲  
蚌

惠王  
周末、趙國の  
王。紀元二七  
八年頃。

ナラザランヤ」ト。居ルコト數月、其ノ馬、胡ノ駿馬ヲ將キテ歸  
ル。人皆コレヲ賀ス。其ノ父曰ハク、「コレ、何ゾ遽ニ禍トナラザ  
ランヤ」ト。家、良馬ニ富ミタレバ、其ノ子、騎ヲ好ミ、墮チテ其ノ  
髀ヲ折ク。人皆コレヲ弔ス。其ノ父曰ハク、「コレ、何ゾ遽ニ福ト  
ナラザランヤ」ト。居ルコト一年、胡人、大イニ塞ニ入ル。丁壯者、  
弦ヲ引キテ戰フ。塞ニ近キ人、死スルモノ十二九。コレ、獨リ跛  
タリシ故ヲ以テ、父子相保テリ。故ニ、福ノ禍トナリ、禍ノ福ト  
ナル、化極ムベカラズ、深測ルベカラザルナリ。(淮南子)

二 漁夫ノ利

趙、マサニ燕ヲ伐タントス。蘇代、燕ノタメニ、惠王ニ謂ツテ  
曰ハク、「今日、臣來リテ、易水ヲ過グ。蚌、方ニ出デテ曝セリ。而ル

擒—擒

ニ、鷓其ノ肉ヲ啄マントシタレバ、蚌合シテ、其ノ喙ヲ箝メリ。  
 鷓曰ハク、今日雨フラズ、明日雨フラズンバ、即チ死蚌アラン』  
 ト。蚌モ亦、鷓ニ謂ツテ曰ハク、『今日出デズ、明日出デズンバ、即  
 チ死鷓アラン』ト。兩者相捨ツルヲ肯ンゼズ。漁者得テコレヲ  
 并セ擒ニス。今、趙マサニ燕ヲ伐タントス。燕、趙久シク相支へ、  
 以テ、大衆ヲ敵サバ、臣強秦ノ、漁父ト爲ランコトヲ恐ル。故ニ、  
 王ノコレヲ熟計センコトヲ願フナリ』ト。惠王曰ハク、『善シ』ト。  
 乃チ止ミス。(戰國策)

二九、婦人の力

「婦人の髪は、能く大象を繋ぐ」とは、婦人の力の強くして恐

繋—繋

域—城

コリオラナ  
ス

羅馬の貴族。  
西暦紀元前五  
世紀頃の人。

るべきことを形容せる語なり。こは唯形容のみに止まらず、  
 實際に大船をも繋ぐべく、巨象をも曳くことを得べし。され  
 ども、體力においては、婦人は到底男子に及ばず。銃劍を擔ひ  
 て萬里の異域に遠征し、汗馬に策ちて峻峻の阪路を攀登す  
 るが如きは、固より其の能くする所にあらざるなり。

されど、婦人の精神には特殊の力ありて、其の強きこと、男  
 子の及ぶべからざるものあり。たゞ生活の表面に現れざる  
 がために、弱きが如くなれども、もし一たび、其の裏面につき  
 てこれを見る時は、其の強きこと、實に驚くべきものあるな  
 り。

恨、骨髓に徹する故郷羅馬に攻め入りし勇將コリオラナ



スは、元老院の議官はた僧侶等の來りて、さまゞに退陣せんことを懇請したりしには、動かざること巖の如くなりしが、其の母と妻との痛切なる哀願には、さすがに堪へかねて、「母よ。御身は羅馬を救ひ給へり。されど、御身の子をば殺し給へり」とて、引き返しぬ。我が國にてはかゝる例少なからず。上毛野形名の妻はた楠木正行の母の事の如きは、人のよく知る所なり。

獨り、古のみならず、近く日露の戦争の、我が勝利に歸せしにも、婦人の力の與りて大いなるものありしことは疑ふべからず。彈雨の中を冒し、利刃の下を潜る時、出發のをりの母の訓誡、妻の別辭は、喇叭の音、將校の號令よりも、強き力とな

スパルタ人  
古代希臘の一  
部、尙武を以  
て名高し。

デバーノン  
公爵  
傳未詳。

れるをおもふべし。昔のスパルタ人の母が、其の子の門出に盾を授けて、「勝ちて持ち歸れ。さらずば、これに乗りて歸れ。」と、瞋せる語はたデバーノン公爵夫人が、一揆に擒へられし時、其の夫に、「ゆめく、臆したまふな。此の身を助けんばかりに、朽ちざる恥辱を買ひたまふな。たとひ、御身が、身を殺して此の身を救ひ給ふとも、御身なくては一日も長らふべくもあらぬ。此の身なり。ゆめく、敵に降服し給ふな」と言ひ放ちたりしは、まことにけなげなりといふべし。

これらは、事ある時に於ける例なれども、婦人の力の最も多く現るゝは、むしろ、平時の家庭、及び社會の生活にあり。家庭は社會における樂園にして、又一大感化場なり。しかも、家

ベンジャミン  
一七八六年生  
英國の畫家、  
一八四  
六年歿す。

庭をして、常に平和を保ち、快樂を享くることを得しむるものは、愛情に外ならず。而して、其の愛情は、妻たるものの暖き心より湧き出づるものなり。實に此の愛情こそは、子女たり、夫たるものの性情を融和し、感化するものなるなれ。歴史畫家として有名なりしベンジャミン・ヘードンが、我がメリーは、我がために、實に善良にして、愛情深き妻なり、有事の時の女丈夫、平和の時の天使なり」と言ひしは、よく妻たるものの力の、大いたることを言ひ盡せり。

ことに、幼兒は、日夜母より受くる感化に由りて、其の人格の基を形成するものなり。偉人の出でし家庭を見れば、其の母の感化によるもの多きを知るべし。彼のウォシントンが、

道子

職識

常に、父のことは、殆ど己の記憶に存せず。唯其の容貌と愛情とが、おぼろげに眼底に残れるのみ。我が運命と名譽とは、すべてこれ、母の賜に外ならず」といへるは、母としての婦人の力の、偉大なることを道破したるものといふべし。

かくの如く、婦人は、社會の裏面にありて、甚だ強き力を有し、これを小にしては、家庭の平和を支配し、これを大にしては、社會の風教に影響を及すものなり。されば、婦人は、常に其の特有の美質を涵養して、其の天職を完うせんことを心掛くべきなり。(新撰女子讀本)

### 三〇、交際と文學の趣味

凡そ、女子の交際するに當りて、最も缺乏を感ずるものは話柄ならん。思ふに、男子は外事を掌るものなれば、自ら眼界闊く、見聞することも亦多からん。されども、女子は家門を出づる機會も少なく、たとひ、相當なる社會の業務に従事する者なりとも、その見聞の男子に及ばざるは事實なるを以て、通例の女子は、しばらく談話せんか、忽ち思想盡きて、いひ出づべき言の葉草（葉草）もなかるべし。

これを以て、女子の相會するや、その年齢若き者は戯れ笑ふに止まるか、さなくば、他人の身上を批評して話柄となし、辛うじて一座の興を維持する觀あり。されど、戯れて笑ふは、少女の時代には許さるべけれども、すてに、人の夫人とも呼

ことにこそ  
—(アレ)

ばるゝ時代に於いては、譽むべきわざならじ。まして、交際の話柄として、他の身上を批評するが如きは、女徳を損ふこと最も甚だしきことなれば、固く禁ずべきことにこそ。

然らば、いかにしてこの缺點を補ふを得べき。蓋し、話柄に窮するは、思想の豊富ならざるに由ることなれば、須らくまづ思想の本源を涵養すべし。さらば、雙方の益となるべき話柄、混々として盡くることなきのみならず、その人格も亦おのづから高尚になりぬべし。故に、今後交際しげき世に立たん女子は、まづその思想を豊富にするばかり必要な事はあらじ。

交際上樞要なる思想を涵養せんには、文學を修むるに若

宙一寅

くはなし。即ち、文學の趣味を積み、衆人に對するよきの話柄とすべし。抑、文學は、宇宙の精美を寫し、人情の幾微を表すものなれば、苟も文學の趣味あらんか、その言ふところ、自ら高尚優雅なるを以て、他人の感情を害することなかるべく、また、その語るることによりて、血あり、涙ある人たるを知るべければ、誰かこれに接して、ゆかしき思なからん。わきて、春花、秋月の折につけても、その言錦繡の色あり、その語金玉の聲あるべし。などか、人の福を壽ぐに辭を過らん、人の憂を解くに詞を失はん。

又、文學の趣味ある人は品性高尚なるが故に、門地低く、財寶乏しくとも、高位高官の人と平等の交際を爲すことを得

べし。たとへ、その容貌は人に劣れりとも、文學の徳内に積るものありて、自ら外に現れんには、忽ち人をして敬愛の情を起さしむるに足らん。

昔、一人の僧、法勝寺の櫻の下に佇みけるを、若き女房四五人、うち羣れて花を賞しけるが、これを見嘲りて、「彼も人なみに花を見んとてにや」とて、僧に向ひて、「この花一枝折りてたべ」といひたりければ、この僧うち案じて、

山がつはをりこそ知らね、櫻花

さけば、春かとおもふばかりぞ。

といひかけけり。これを聞きて、先に嘲りつる女房ども、返歌もえせて、驚き愧ぢて立ち去りけりとぞ。春風駘蕩、萬山皆花

法勝寺  
京都鴨川の東  
白河に在り、  
白河法皇の創  
建に係る。今  
廢す。

の候ともならば、到る處に、三々五々打ち羣れて花を賞する少女もあらん、老婆もあらん。彼等は果して如何なる文學の趣味を積めるか。

こゝに注意すべきは、如何に文學の素養ありとて、「われこそ風流なれ」といはんばかりの動作ある者は、眞の文學の趣味ある女子といふべからず。只一見して、表には一丁字も知らざるが如き動作ありて、内に文學の徳を具へたらん、ゆかしきかたこそあらまほしけれ。もし和歌を知らざる友に向ひて、三十一字の話を試み、雅言を解せざる人に對して、俗語を用ひざるが如きことあらば、反りて人を愧ぢしむるに至るべし。最も戒め慎むべきことにこそ。

(三輪田眞佐子—女子日本讀本による)

改訂高等女學讀本卷六終

大大大大  
正正正正  
五五四元  
年年年年  
一一十十  
月月月月  
二十三十  
十七十五  
日日日日  
改改改訂  
訂訂訂正  
再再再發  
版版版發  
發行印刷



發行所

東京市神田區錦町一丁目  
振替口座東京四九九一番

著者 著者 發行者 印刷者 印刷所

改訂高等女學讀本

定價	卷一より各金參拾貳錢
大正七年度臨時定價	卷四より各金貳拾八錢 卷五より各金參拾七錢 卷十より各金參拾貳錢

佐藤 正男

東京市神田區錦町一丁目十番地  
株式會社 鹽井 治書院

東京市京橋區西紺屋町廿七番地  
取締役社長 三樹 一平

仙葉 元太郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地  
株式會社 秀英 舍

株式會社 明治書院

電話本局二四三八番

工  
字  
年  
一  
組  
矢  
田  
香  
子

